

病理学総論・総論実習

科目責任者 矢澤 卓也

学年・学期 2学年・3学期

I. 前 文

病理学とは、疾患のメカニズムを総合的に解析する学問領域であり、臨床医学を学ぶうえで必要不可欠な基礎医学である。生物学、解剖学、生化学、生理学などで人体の正常構造や機能を学んだ医学生は、全身に起こる様々な病的状態を理解するために、病理学、微生物学、免疫学、薬理学などを学び、さらに臨床医学において、患者の病的状態を把握し、診断し、治療する方法を学んでいく。病理学総論では、実際の疾患のメカニズムの基本を肉眼像、顕微鏡像を通じて学び、基礎医学から臨床医学への橋渡しを行う。

病理学総論の骨子は、細胞傷害と修復再生、循環障害、感染症・炎症・免疫、代謝障害、遺伝子・発生の異常、腫瘍よりなり、これらを学ぶことにより、すべての疾患の成り立ちや病態について理解することができる。つまり病理学総論の熟知は、疾患を正しく深く理解することに繋がり、卒後においてもリサーチマインドの涵養に繋がるものである。

II. 担当教員

教授	矢澤 卓也	病理学
講師	矢澤 華子	病理学
助教	岩本 雅美	病理学
助教	柏木 維人	病理学
助教	石井 順	病理学
病院准教授	下山田 博明	埼玉医療センター病理診断科

III. 一般学習目標

様々な臓器に発生する疾患が、病理学総論の骨子である各病態の複合により形成されていることを理解し、疾患に対する基本的な病態分析能力を養う。

なお、疾患の基礎となる様々な病態や病変は、病理学的な用語で表現されることが多い。したがって、臨床医学講義の開始直前であるこの時期に、英語表記を含む用語の意味を正確に把握し、使用できるようになることが肝要である。

IV. 学修の到達目標

- 1) 病理学の基礎となる細胞傷害と修復再生、循環障害、感染症・炎症・免疫、代謝障害、遺伝子・発生の異常、腫瘍について十分な知識を有し説明できる。
- 2) 臨床医学においても頻用される病理学的な用語について説明でき、かつ使用できる。
- 3) 疾患の原因が、臓器にどのような形態的变化をもたらしているかについて、肉眼像、顕微鏡像をイメージしながら説明できる。

V. 授業計画及び方法 * () 内はアクティブラーニングの番号と種類

- (1: 反転授業の要素を含む授業 (知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。)
2: ディスカッション, デイバート 3: グループワーク 4: 実習, フィールドワーク 5: プレゼンテーション
6: その他 空欄: 該当なし)

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担当者	アクティブラーニング
1	11	2	月	1	病理学概論	矢澤 卓也	1
2	11	2	月	2	細胞障害と修復再生1	矢澤 華子	1

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担当者	アクティブ ラーニング
3	11	2	月	3	細胞障害と修復再生2	矢澤華子	1
4	11	2	月	4	循環障害1	矢澤華子	1
5	11	2	月	5	循環障害2	矢澤華子	1
6	11	4	水	3	循環障害3	矢澤華子	1
7	11	5	木	4	細胞障害と修復再生・循環障害 実習1	病理学教員全員	4
8	11	5	木	5	細胞障害と修復再生・循環障害 実習2	病理学教員全員	4
9	11	10	火	2	細胞障害と修復再生・循環障害 実習3	病理学教員全員	4
10	11	10	火	3	細胞障害と修復再生・循環障害 実習4	病理学教員全員	4
11	11	12	木	2	代謝障害1	矢澤卓也	1
12	11	12	木	3	代謝障害2	矢澤卓也	1
13	11	16	月	2	代謝障害 実習1	病理学教員全員	4
14	11	16	月	3	代謝障害 実習2	病理学教員全員	4
15	11	17	火	2	炎症・感染症1	矢澤卓也	1
16	11	17	火	3	炎症・感染症2	矢澤卓也	1
17	11	24	火	3	炎症・感染症3	矢澤卓也	1
18	11	26	木	3	炎症・感染症 実習1	病理学教員全員	4
19	11	26	木	4	炎症・感染症 実習2	病理学教員全員	4
20	11	26	木	5	炎症・感染症 実習3	病理学教員全員	4
21	11	27	金	4	遺伝子・発生の異常1	矢澤華子	1
22	11	27	金	5	遺伝子・発生の異常2	矢澤華子	1
23	11	30	月	1	遺伝子・発生の異常3	矢澤華子	1
24	11	30	月	2	腫瘍1	矢澤華子	1
25	11	30	月	3	腫瘍2	矢澤華子	1
26	12	1	火	1	腫瘍3	矢澤卓也	1
27	12	1	火	2	腫瘍4	矢澤卓也	1
28	12	1	火	3	腫瘍5	矢澤卓也	1
29	12	2	水	2	腫瘍実習1	病理学教員全員	4
30	12	2	水	3	腫瘍実習2	病理学教員全員	4

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担当者	アクティブ ラーニング
31	12	7	月	4	腫瘍実習3	病理学教員全員 下山田 博 明	4
32	12	7	月	5	腫瘍実習4	病理学教員全員 下山田 博 明	4
33	12	7	月	6	腫瘍実習5	病理学教員全員 下山田 博 明	4

VI. 評価基準（成績評価の方法・基準）

定期試験，反転講義時の口答内容，受講態度を総合的に評価する。

評価の割合は定期試験（80%），口答内容（10%），態度（10%）とする。但し，合格するには定期試験の成績が60点以上であることが必須である。

実習は全出席を必須とする。

なお定期試験問題内の英語問題は「医学英語 II」の評価として集計される。

VII. 教科書・参考図書・AV資料

[総論講義の参考書]

iSmart 標準病理学, 7版 (医学書院)

Robbins Basic Pathology 10th ed. (V. Kumar, A. K. Abbas, J. C. Aster, 2018, Elsevier)

ロビンス基礎病理学, 10版 (豊國伸哉, 高橋雅英訳 2018, 丸善出版)

NEW エッセンシャル病理学, 6版 (長村義之, 笹野公伸, 他編, 2009, 医歯薬出版)

標準病理学, 6版 (北川昌伸, 仁木利郎編, 2019, 医学書院)

解明病理学, 4版 (青笹克之, 加藤光保, 金井弥栄, 菅野祐幸編, 2021, 医歯薬出版)

ルーピンカラー基本病理学, 5版 (河原 栄, 他訳, 2015, 西村書店)

[組織形態の参考書]

カラーアトラス病理組織の見方と鑑別診断, 7版 (赤木忠厚, 他編, 2020, 医歯薬出版)

組織病理アトラス, 6版 (深山正久, 他編, 2015, 文光堂)

VIII. 質問への対応方法

随時受け付ける (総合教育研究棟9階 病理学講座)。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）	
医師としてのプロフェッショナリズム 幅広い教養、利他の精神、医師に求められる品格を身につけ、豊かな人間性を育み、他の医療者と協調して、多様な価値観を尊重する全人的な医療を実践できる	
能動的学修能力 医学知識・技能を主体的に学び、情報・科学技術を活用して、生涯にわたって自ら問題を発見し、解決することができる	◎
地域医療の理解 地域社会における医療の役割と、その中核を担う意味を理解できる	
国際性 国際社会における医学・医療の動向や課題を理解し、課題解決に向けて行動することができる	
リサーチマインド 研究活動における積極的な創造・発信に挑み、医学・医療の進歩に貢献することができる	○

X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験は原則記述試験となるため、講義、配布物を復習することにより自己学習すること。

XI. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

事前学習（30分）：事前配布資料およびiSmart病理学の該当項目を通読し、要点を理解しておくこと

事後学習（30分）：講義で示された重要点について、iSmart病理学の総論部分、参考図書、配布物を用いて自己学習すること。

XII. コアカリ記号・番号

PS-01-01, PS-01-02, PS-01-03, PS-01-04